

聖書：マタイ 5：10～12

説教題：義のために迫害されている者は幸い

日時：2017年10月15日（朝拝）

山上の説教冒頭の「幸い」についてのイエス様の教えの8つ目となります。一連の教えの最後のものです。これまで見て来たイエス様の「幸い」についての教えは、この世が考える幸いと何と異なっていたでしょうか。3節では「心の貧しい者が幸い」と語られました。4節では「悲しむ者が幸い」と語られました。この2つを見ただけでも、いかに神から見て幸いな人とこの世が考える幸いな人との間には大きなギャップがあるかが分かります。今日見る8つ目の幸いもそうです。ここに「義のために迫害されている者は幸い」とあります。迫害とは何でしょうか。迫害とは、その字から判断すれば、迫って害を与えること、あるいは害を与えるために迫ること。ここで使われているギリシャ語の基本的な意味は追いかけるというものです。ライオンが獲物を追いかける時などに使われます。追いかけられることは誰でも嫌なものです。時々夢の中で誰かに、あるいは何かに追いかけられる夢を見ることがあります。そして目を覚まして夢だったと分かり、助かった～！と思う。その時、追いかけられる夢を見て幸せだった！と思う人はいるでしょうか。まずいないでしょう。11節には迫害という言葉と並んで「ののしり」という言葉と「悪口を浴びせる」という表現が出て来ます。ののしられることは誰にとっても嫌なことでしょう。心が傷つきますし、みじめな思いになりますし、精神的にボロボロになるかもしれません。また「ありもしないことで」と言われていますように、不当なこと、真実でないことであつたら、なおさらそうです。なのにこれが幸いとは一体どういうことでしょうか。

私たちがまず注目すべきは、ここで「義のために」迫害されている者と言われていることです。「義」という言葉は、近いところでは6節に出て来ました。「義に飢え渴く者は幸いです」と。この義とは神から見て正しいこと、神が良しとされること、神が喜ばれる正しい状態あるいは行動のことです。3節から順番に見て行く時に分かることは、自分の貧しさを認め、罪を悲しむことを通して、私たちはただ恵みにより、天の御国に属する者とされました。そしてやがて天国という地を受け継ぐ者にされました。そのことを知る私たちは義に飢え渴くようにして求める者となります。この世では決して完全には至りませんが、神の御心に沿って、神が良しとされることを求めて歩む者となります。しかしそのように義に飢え渴いて歩む者が、その義のために迫害されるということ

が今日の 10 節で言われています。なぜ正しいことを求める人が迫害されるのでしょうか。その答えは、この世は神に敵対する世であり、神の正しさを受け入れず、拒否する世だからということです。この世の価値観と神の価値観とが対立するのです。今見ているキリスト教的幸いの教えを見てもそうです。

たとえば私たちは 3 節以降、心の貧しい者、悲しむ者、また柔和な者すなわちへりくだった者が幸いであることを見て来ました。私たちはみじめで、どうしようもない者たちなのに、ただ神がキリストにあって、その十字架により、赦し、あわれみ、救ってくださる。私たちはこの神の恵みを賛美して生きています。しかし世の人々は、このような考え方を面白くないと思うのです。なぜならそこには人間は生まれながらにしてみな罪人であるという考えがあるからです。あなたもまた十字架のキリストの前にひれ伏す必要がある罪人なのですよというメッセージがあるからです。それは認めたくない。不愉快である。そういう反発があるのです。ですからこういう価値観に立つ人たちを面白くないと思い、否定し、時にはつぶしてやろうということになるのです。6 節の「義に飢え渴くこと」もそうです。義を求めることは良いことかと思いますが、違う価値観を持つこの世の人々はそれは面白くないと思います。クリスチャンは真面目ぶっていて、付き合いにくい。今日はみんなで楽しく騒いで少々羽目をはずそうという雰囲気になっているのに、それに一緒に加わらない。するとその場がしらけて来る。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」ところを、一人渡らない人がいるとどうなるでしょう。渡ってしまおうとする人たちの良心が責められるのです。7 節以下もそうです。あわれみ深い者、心のきよい者、平和をつくる者。このように歩む人を見ると、紳士ぶっている付き合いにくい奴らだと思うのです。だからあいつとは一緒に遊ぶのはやめようと仲間外れにされ、何かあると攻撃の対象にされてしまう。

10 節で「義のために」と言われていたことは、11 節では「わたしのために」すなわちイエス様のためにと言われています。ここにイエス様に従う人は世から迫害を受けるということが言われています。改めて思うことは、イエス様はみんなに受け入れられたのではないということです。私たちは本物のクリスチャンはこの世の多くの人々にも認められ、評価される人になると思うかもしれませんが。しかしクリスチャンの最高の理想、最高の模範であるイエス様は、この世からそのように受け入れられ、賞賛されはしませんでした。むしろこの世はイエス様を十字架をつけました。みんながイエス様に対して「十字架につけろ」と大合唱しました。これはたまたまのことではなく、この世がその

性質を現した出来事です。この世は神に敵対しています。従ってその神が送った一人子をも激しく拒絶しました。ヨハネの福音書 15 章 18 節：「もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。」

なぜ世はイエス様に敵対し、イエス様を迫害したのでしょうか。ヨハネの福音書 3 章 19～20 節：「光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」 光は私たちとその周りを照らし出し、良い働きだけをすると思うかもしれませんが。しかし光は一方で暗やみに隠れていたものを見えるようにし、その真実の姿を暴き出すこともします。このため、明らかにされたくない罪を持っている人たち、あるいは自分は立派な人間だと思いついでいるが実際はそうでない人たちにとっては耐えられないということが起こって来る。ヨハネの福音書 7 章 7 節：「世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。」 一例としてパリサイ人のことを考えたいと思います。彼らはイエス様が来るまでは道徳的な人々また宗教に熱心な人々として、一般民衆から敬われ、また自分たちでもそういう人間だと自負していました。ところがまことの光であるイエス様が来たことによって明らかにされたことは何でしょうか。それは自分たちの義は安っぽいものでしかないということ。イエス様の言葉の前で、またイエス様の生き方の前で、自分たちの化けの皮が引っ剥がされた。これまで立派だと思って来た自分たちの義の不完全さ、その浅はかさ、その醜さが浮き彫りにされた。これは彼らにとって我慢ならないことでした。だからこんな邪魔な奴は除いてしまえ！という行動に出た。ですからこういうイエス様に従って歩むなら、私たちも世から同じような扱いを受けることに至るのは必然的なことなのです。私たちは不完全な形ではしかイエス様の光を反映できませんが、その光を映し出す程度に、世から疎んじられ、嫌われ、憎まれ、また迫害されるということが起こるのです。

しかしイエス様はこういう人が幸いだと言われます。10 節後半：「天の御国はその人たちのものだから。」 お気づきのように、これは一つ目の 3 節後半の言葉と同じものです。最初にこのことが語られ、最後にまたこの幸いに戻る形で結ばれています。この言葉は何を示しているのでしょうか。それは迫害されていることは、その人が天の御国に属する人であることと関係しているということです。その人は天の御国に属する人だから、この世で迫害を受けていると言っても良い。迫害の事実はそのことを示します。ヨ

ハネの福音書 15 章 19 節：「もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。」 私たちが改めて認識すべきは、私たちは今、この世で生活しているけれども、この世に属している者ではないということです。聖書は私たち信仰者のことを、一時的な外国生活をしている寄留者にたとえています。外国で生活すると、周りから奇異な目で見られるでしょう。言葉の違い、考え方の違い、生活習慣の違いによって、不思議な目で見られたり、笑われたり、ばかにされたりすることもあるでしょう。その時、どうすべきでしょうか。周りの人たちの反応を恐れて、母国の誇りを捨て、そこにいる人々のまねを一生懸命して、不本意な生活を送るべきでしょうか。それは愚かでしょうか。むしろそういう扱いを受けた時、その外国人は思うべきです。これは私が外国人であることを示している。私はやはりこの国の者ではないのだ！それと同じように私たちもこの世の人々から迫害された時に思うべきです。これは私がこの世の国の人ではないことを示している。私はこの世ではまさに外国人のような者である。では一体私はどこの国の者なのでしょう。イエス様は言っています。天の御国はその人たちのものだから、と。その幸いを改めて味わうべきです。そしてその誇りをもって生活すべきです。

ですから私たちは信仰生活を送る中で、世からの迫害を受けた時、驚くべきではありません。むしろ私たちはこのような本来受けてしかるべき扱いを世から受けているだろうかと問わなければならないのではないのでしょうか。確かに今日の日本はかつてのある時代ほどに迫害の時代ではないかもしれませんが。しかし世は世です。その本質は同じです。もしこの迫害の話が自分と何の関係もないように思われるとしたら、それは自分があまりにもこの世に同化してしまっているからではないのか。この世と妥協しているため、この世とうまくやっているだけではないのか。それによってイエス様がここで言われる幸いがよく分からなくなっているし、それを失っていることになっていないだろうか、と点検してみなければならないのではないのでしょうか。

そしてイエス様は 12 節でさらに「喜びなさい。喜びおどきなさい！」とまで言います。「天ではあなたがたの報いは大きいから」と。ここでは天に行った時に与えられる報いの大きさに目を留めるようにとされています。天で受ける祝福は地上で私たちが持つものと比較になりません。この世のものは一時的であり、時間が経つと傷つき、古びるものであり、やがて消え行き、最後にはガッカリするものです。それに対して天で

与えられる褒美はいつまでも消えず、その輝きは失われず、永遠に私たちに喜びを与えるものです。そしてその報いは「大きい」と言われています。参考になる御言葉として、マタイの福音書 19 章 29 節にこうあります。「また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」 さらにマルコの福音書の並行箇所では「その百倍を受けない者はありません」と言われています。私たちが神に従うためにこの世で何かを失っても、その 100 倍の祝福を神が天で備えていてくださると仰ぐならどうでしょうか。全く損失はありません！たとえ地上で悲しみを経験しても、その 100 倍以上の報いがやがての天で与えられる。そのことを思うと、喜びがふつふつと沸き上がって来て、ついには確かに喜び踊りたくなくなって来ます。100 倍というのはもちろん、ものすごく大きいということを使うための表現でしょう。実際に 100 倍という量を考えても良いのですが、とにかく天における報いは私たちが地上で考えるようなちっぽけなレベルではない。だから私たちは何も失わない。そのことを思って恐れず、むしろ躍り上がって、喜んで従って来なさいとイエス様は招いています。

そして最後に「あなたがたより前にいた預言者たちもそうだった」と言われています。私たちは自分が苦しい目に会うと、なぜ自分にはこんなことが起こったのかと思いやすいものです。しかし旧約聖書を読めば、預言者たちもみなそうでした。モーセ、ダビデ、エリヤ、エレミヤ、ダニエル、その他、何人もの預言者たち……。従って義のための迫害は、信仰者にとって勲章のようなものです。素晴らしい身分証明書のようなものです。確実に天に入る保証のようなものなのです。

以上の御言葉を読んで思われることは、私たちはどこを見て生活しているかということではないでしょうか。ただこの地上のことだけを見ているのか、それともやがてたどり着こうとしている天を見つめて歩んでいるのか。私たちは主を信じて天へ導かれようとしている者たちです。そこに行くまでのしばしの間、迫害は避けられません。それは必ずあるのです。しかしそれは私たちにとって素晴らしいしるしを意味します。私は何者なのか、私はどこに属する者なのか、私はどこに行こうとしている者なのか。そのことを改めて教えてくれるものです。迫害を受ける中で私たちの前には二つの道があるでしょう。一つはこの世の人々に嫌われることを恐れて、人々の顔色を伺い、この世の価値観と妥協して、この世の人のようになることです。そして結局、天を目指して進む歩みをやめてしまう。もう一つは、迫害は私たちに対して素晴らしい事実を示している

と受け取って、これを甘受し、益々行くべき天に目を上げて喜び進むことです。その天に至る途上においては、この世の迫害はくぐり抜けて行かなければなりません。その中でむしろ私たちは自らの信仰を試され、磨かれ、また聖められ、整えられていくことができるのです。私たちは今週も天に向かって旅を続ける者たちです。天の故郷に向かって巡礼の旅を続ける者たちです。その行くべき天をいつも仰ぎ見つめている者でありたい。それゆえに迫害されることがあればかえって喜ぶことが、いや躍り上がって喜ぶことができますように。そして神がその先に備えてくださる大きな祝福をいよいよ見つめて喜び、御国の民として良きあかしを立てる歩みへ進みたいと思います。